

市内の高等学校の「進路指導担当教諭」との“本気”で語ろう会 会議録

団体名	市内の高等学校の「進路指導担当教諭」
日時	令和4年5月12日（木）15時00分から16時30分まで
場所	鹿屋女子高等学校 多目的ホール(NANOHANAHALL)
参加者	市内の高等学校進路指導担当教諭：6名
	市長、市長公室長、人口減少対策本部職員

意見交換

- ・生徒の進路状況について
- ・生徒及び保護者の進学、職業観について
- ・求人状況
- ・進路指導における課題
- ・地域に貢献したいという思いの醸成について

【参加者の意見等】

○生徒の進路・就職の状況について

- ・進学希望（大学・短期大学・専門学校）の生徒が増えている。
- ・大学に進学してからやりたいことを見つけたいという意向の生徒が多い。
- ・普通科は大部分が進学希望である。（官公庁等に就職する生徒が一部いる）
- ・奨学金を借りる学生も多いので、返済を含めた生活費など安定した収入を就職に求める必要がある。
- ・進学後の就職については、進学地（キャンパス）近辺での就職活動にシフトされがちである
- ・鹿屋市内の企業に魅力があって、就職する生徒もいる。
- ・地元就職したくても鹿屋市内の就職情報の不足や収入の低さに課題がある。また、資格を生かす仕事がないことから市内での就職が難しい。
- ・卒業後、地元に戻る希望がある生徒は、公務員及び教員志望が多い。
- ・最近では、IT関連への就職希望者が増えている。
- ・事務職希望の生徒は、地元志向が強いが、鹿屋市内に安定的な求人がない。一方で、事務職を求め、県外へ出るかということ、県外ではその地元高校を優先して採用するため、事務職希望の生徒には厳しい状況である。
- ・販売・サービス業は、市内の選択肢が狭く、給与体系の課題もあり、県外希望が多い。
- ・工業系や調理、園芸（果樹関係等）等については、市内に就職先が少なく、給与が低い等の理由から、県外への就職が多い。
- ・美容・医療・児童教育に就職希望の生徒が多いが、市内に当該職種の短期大学、専門学校がないため市外への転出が多く、そのまま市外で就職する生徒が多い。美容業界は、近年、高卒新卒よりも専門学校等進学後の求人が多いため、進学希望の生徒が増えている。
- 医療系を希望する生徒は、希望職種が明確な生徒が多い。

- ・畜産業を中心に、家業を継ぐ場合は、一度市外に進学した場合も含め、地元に残るケースが多い。
- ・農業高等学校に進学した生徒は、卒業後、地元に戻ってくる傾向がある。

○進路相談・進路指導の状況について

- ・生徒に就職の意向を聞いたうえで、卒業生の就職先を紹介することもある。
- ・働きたい職種が決まっているわけではなく、漠然と地元に残りたい生徒には、面談を重ね、就職支援を行っている。
- ・子供の意見を尊重したいという考えの保護者が多く、県外に進学・就職してもよいと考える保護者も多い。学校は、生徒及び保護者の意向を尊重し進路指導をしている。
- ・保護者へ就職ガイダンスへの参加を勧めているが、コロナ禍で参加率は低い。
- ・卒業生の就職先について、専門学校や短大からはよく情報提供がある。
- ・卒業生がUターン等をする際に、学校に当時の担任等が残っている場合は、相談を受ける場合もある。

○求人状況

- ・企業の求人は、県内外問わず増えている状況である。鹿児島を含む九州地方の生徒に対する評価が高く、特に関東からの求人が増えている。
- ・WEBのみで求人を出している企業もあり、生徒から応募希望があれば、ハローワークへ求人を出してもらうよう企業へ依頼している。
- ・ネット検索の方が就職情報は効率よく探せる。
- ・鹿屋市に残りたいが、働きたい企業がないという声がある。
- ・市内企業・事業者の情報が足りないと感じる。コロナ禍で県外企業の学校訪問が減っており、市内の企業は雇用確保について、今がチャンスだと思う。
- ・人材を求めて積極的に学校訪問を行う企業もある中、市内企業は市外企業に比べると、採用に関する積極的な動きがないと感じる。
- ・企業には積極的に訪問してほしい。新年度が始まった頃が良い。求人票が出そう7月以降では遅い。
- ・各学校に求人票を出すときは、必ずハローワークを通す必要があるが、仕組みを把握されていない企業等もあるため、ハローワークや企業との連携が必要だと感じる。
- ・求人票は、ハローワーク用の統一した様式のため、様式で差がつくことはない。
- ・専門科に対して、専門以外の様々な職種の求人がある。生徒は自由に見ており専門外の企業に就職する生徒もいる。
- ・採用試験は、企業所在地での受験のほか、関東・関西圏の企業が、福岡や鹿児島へ会場を設け、試験を実施する場合もある。

○その他

- ・学校別で企業説明会はないが、学校企画の職場体験は実施している。

- ・高校生向け合同企業説明会等の開催は、校長が出席を命令できる（ボランティアにならない）平日が望ましい。
- ・地元就職を推進するため、バスツアーによる職場見学を積極的に行っている自治体もある。
- ・インターンシップは、希望業種での受け入れ企業が足りないなど、ミスマッチがある。
- ・就職したい企業が見つかったら、早期離職を防ぐため企業見学を行うよう生徒に勧めている。
- ・短大や専門学校等の進学説明会は、各高校単位で行っている。

○地域に貢献したいという思いの醸成について

- ・郷土愛＝地元で働くことにはならないと思う。鹿屋が好きだとしても、市内企業の情報が少ないことに加えて、収入が少ない、資格を生かす仕事がないことから、市内での就職が難しい。
- ・Uターン者を増やすためには、高校よりもハローワークとの密な連携が必要。
- ・市内に居住し、周辺自治体で就労している生徒も多い。鹿屋市内だけではなく、広く大隅半島全体で連携してほしい。周辺自治体も同じような取組をしていると思うので、横の連携を図るべき。

【市長】

- ・高校卒業後に就職した生徒のうち、8割は市外へ就職している。生徒に選ばれるまちにしていきたい。
- ・どうしたら鹿屋に残ってもらえるのか、また県外へ進学後に鹿屋市で就職してもらうためにはどうしたらよいかが課題である。
- ・高校生の就職に関する調査では、鹿屋市外で働きたい理由として、「地元を離れて一人暮らしがしたい」や「働きたい職種や企業がない」の割合が大きい。このような子供たちの思いに、どう応えていけばいいか、日頃から生徒の進路指導を担う先生方から頂いた意見を踏まえ、今後の人口減少対策ビジョンに活かしていきたい。
- ・人口減少によって、学校の統廃合や病院・商店街の衰退、集落機能の維持が困難になるなど、様々な問題が起こる。
- ・先般、保護者が3年間、南隅から鹿屋市内に毎日高校へ通学の送迎を行っていた話を聞いた。物理的に自力で高校に通学が不可能な事案なども見受けられ、今後このような部分にも対策を打たなければならない。
- ・人口を市町村ごとに競い合っている状況が良いとは思わない。広域的な視点が必要である。